TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

# 江戸前の海 学びの環づくり 瓦版 第19号



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-07-22<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1822 |

えどまえ　うみ　まな　わ
# 江戸前の海　学びの環づくり
## 瓦版　第19号

東京海洋大学 江戸前ESD協議会　〒108-8477　東京都港区港南4-5-7　東京海洋大学品川キャンパス

福島県南相馬市

## 鹿島の海と魚を語ろう Part Ⅱ

川辺 みどり（東京海洋大学・教授）

《みなみそうま復興大学とは、地域に思いのある住民・企業・団体等の地域の主体と大学等外部の復興支援に思いのある人たちが、お互いの活動を知りあうことにより、地域における具体的な活動を共有し、まちづくり・ひとづくりを通じた「地域力」の向上を目指す「大いなる学び（大学）」の場です。》　（南相馬市HPから）

### 今年度の目標は　漁業体験ツアー・プログラムづくり

2018年11月下旬に、ワークショップ「鹿島の海と魚を語ろう」Part Ⅱ　を3日間かけておこないました。これは、昨年度の「鹿島の海と魚を語ろう」に引き続き、「みなみそうま復興大学」（南相馬市）の助成金をいただいて、相馬双葉漁業協同組合（相双漁協）鹿島地区青壮年部と共に東京海洋大学江戸前ESD協議会がおこなうワークショップです。

今年度の目標は、鹿島支所漁業体験ツアーのプログラムを作成すること、2017年10月に初めて相双漁協鹿島支所を訪問して船主会・青壮年部・女性部それぞれの代表の方々とお目にかかり、私たちに何ができるかを相談したときに、ご提案いただいたアイディアのひとつです。

今回参加した東京海洋大学大学院生・学部生は6名、うち4名は2018年2月に開催したワークショップ「鹿島の海と魚を語ろう」にも参加しているので、二度目の南相馬訪問になります。また、うち5名は、2018年11月初めの東京海洋大学「海鷹祭」で催した「福島の海＠東京海洋大学プロジェクト2018 福島の美味しい魚について漁師さんたちと話そう」にもスタッフとして参加しています。これらの学生6名に教員2名を加えた総勢8名で南相馬を訪問しました。

写真１　11月23日夜。農家民宿・いちばん星で、晩ごはんを囲む東京海洋大学チーム。

写真２　「一般社団法人 いちばん星南相馬プロジェクト」里山カフェにて、理事長の星さんから農家民宿事業などについてのお話を伺いました。

写真３　お話を伺ったあと、星さんを囲んで全員で写真撮影。

## Day１： 11月23日（金）星巌さんに聴く
## ＠農家民宿・いちばん星（南相馬市）

この日、私たちは東京駅から東北新幹線に乗って北上、仙台で常磐線に乗り替えて海岸沿いを南に戻り、原ノ町駅（南相馬市）で下車しました。ここでお出迎えくださった「一般社団法人　いちばん星南相馬プロジェクト」理事長の星巌（ほし いわお）さんと半年ぶりに再会、「農家民宿・いちばん星」へと車両で連れて行っていただきました。

農家民宿・いちばん星は、南相馬市のなかでもっとも規模が大きな農家民宿です。まずは母屋で、地元産の野菜をふんだんに使った滋味あふれる数々のおかずにふっくら炊かれたご飯の美味しい晩ごはんをいただきました（写真1）。

お腹がいっぱいになったところで、同じ敷地内にある「里山カフェ」に場所を移しました。ここで、星さんから、南相馬の農家民宿事業の状況と課題、そしてこれからの事業展開の展望についてお話しいただき、また、私たちからの質問にお答えいただきました（写真2、写真3）。

この夜の月は満月、常磐線の列車の中から東の空に見えていた巨大な黄色いお月さまは、星さんの講話が終わって母屋に戻る頃には、漆黒の夜空に高く白く輝いていました。

## Day２：11月24日（土）ワークショップ
## 《鹿島地区での漁業体験ツアーを考える》
## ＠相馬双葉漁協鹿島支所（南相馬市）

ワークショップ２日目の24日朝は、星さんのご案内で、相馬双葉漁協鹿島支所を訪問しました。

鹿島支所がある南相馬市鹿島区烏崎（からすざき）は、もとは真野川漁港を中心とした漁村集落でしたが、東日本大震災時の津波によって大きな被害を受けました。現在は、住民の方々は海岸から内陸へと住まいを移され、漁港周辺の土地はほぼ整地された状態です。

私たちは、ここで相双漁協鹿島地区青壮年部の方々と福島県水産業普及指導員の新関晃司さん（福島県水産事務所）と合流し、2年前に再建された相双漁協鹿島支所施設のうち、荷捌き場（写真4）と海水取水施設（写真5）、そして漁港に隣接する烏崎海浜公園（写真6）をご案内いただきました。

その後、相双漁協職員の阿部真一さんに設営いただいた会議室にて、相双漁協鹿島地区青壮年部のメンバー8名に星さんと新関さんにも加わっていただき、いよいよワークショップ開始です。

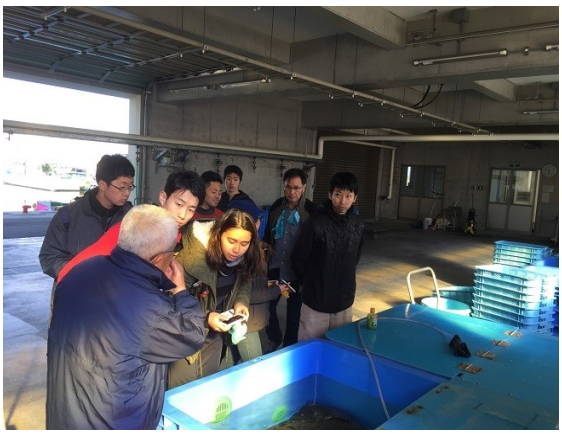

写真４　２年前に再建された相双漁協鹿島支所施設の荷捌き場やカレイの生簀について、鹿島支所代表の松野豊喜さん、福島県水産業普及指導員の新関晃司さんからご説明いただきました。

写真５　海水取水施設で、相双漁協職員の阿部真一さんから説明を受ける海洋大チーム。

写真６　真野川漁港から歩き、少し高さのある丘を登ると見晴らしのいい烏崎海浜公園に出ます。

写真７　松野相双漁協鹿島支所代表から開会のご挨拶をいただきました。

ここでは4人ずつ4つのテーブルに分かれて座りました。始めに、相双漁協鹿島支所代表の松野豊喜(まつの とよき)さん(写真7)から開会のご挨拶をいただき、また、それぞれのテーブルで自己紹介をしました。

まず、星さんから「南相馬の農家民宿と漁業ツアーの連携の可能性」についてお話しいただきました。そして、これをふまえて、今までに見聞きしてきたことをもとに、テーブルで「鹿島の海の漁業体験ツアーへの期待と課題」について、話し合いながらポストイットに書いて、模造紙に貼りだしていきました(写真8)。

テーブルでの話し合いが概ね終わったところで、話しあった内容を全員で共有しました(写真9)。

最後に、魚類学がご専門の河野博教授から魚類の進化についてミニ講義、そして小野田義幸青壮年部部長、新関さん、星さん、松野代表から感想をひとことずついただき、この日のワークショップは閉会しました。

私たちは、ふたたび星さんに鹿島駅まで送っていただき、東京への帰路につきました。

写真８　話し合い中の小野田さん（手前左）、柴田さん（奥左）、 新城さん（手前右）、新関さん（奥右）のテーブル。

写真９　テーブルで話し合った内容を発表する小菅さん（左）と八田さん（右）。

## Day３：11月27日（火）まとめのミニ・ワークショップ@東京海洋大学（東京都港区）

東京海洋大学に戻って、週明けの火曜日、南相馬へ行った学生4名と教員2名とで、鹿島のワークショップの結果をまとめるために、ミニ・ワークショップをおこないました。

まず、鹿島支所でテーブルに分かれて話し合いながら作成した、漁業体験ツアーへの「期待」、実施のための「課題」、ツアーについて「知りたいこと」をまとめた模造紙各4枚から貼り付けられたポストイットを外し、それぞれテーマごとにまとめなおしました。

この内容については、次ページ以降に学生が分担して報告してくれていますので、表1～3とともにご覧ください。

表１　漁業体験ツアーに対する期待

| 福島県南相馬市の真野川漁港における漁業体験ツアーへの期待 | |
|---|---|
| ①ツアーに期待できること | 刺し網以外の漁業体験ツアー体験<br>様々な漁法の体験<br>これからの漁業体験ツアーに期待<br>持続してやれたらいい<br>刺し網体験に期待<br>ヒラメ・エイ・カスザメ…生きた魚が見れる！！ |
| ②ツアーと漁業から期待できること | 漁業を知る<br>現場の状況が伝わりやすい<br>漁の後片付けが見られて新鮮<br>体験を通して漁師のイメージアップ |
| ③漁業に期待できること | 出漁数を増やしたい<br>毎日海に出たい<br>もっといろいろな漁を見てもらいたい<br>漁業者さん自身の海に出る回数を増やせる |
| ④漁業体験ツアーに期待できること（①②③を踏まえて） | 漁船ツアーで獲れた魚をみんなでさばく<br>獲った魚を食べたい<br>獲って食べる→魚食の普及<br>→魚の鮮度・質が良い<br>→鹿島の魚をたくさん食べてくれる |
| ⑤漁業体験ツアーによる波及効果 | みなとまつりと連携<br>体験ツアーの参加する人が多くなる<br>観光客の増加<br>地元水産物のアピール<br>漁獲した魚の買い取り<br>魚の価値を上げたい<br>景色<br>土地が広い・きれい<br>海に魅力を感じてもらう<br>海を見られる、それ自体が楽しい（遊覧船）<br>後継者<br>農家民宿との連携 |

# ワークショップ《南相馬市鹿島地区での漁業体験ツアーを考える》
# 漁業体験ツアーへの期待、課題、知りたいこと

## 漁業体験ツアーへの期待

福島県南相馬市鹿島地区青壮年部の方たちとワークショップを開催し、漁業体験ツアーをおこなうとしたらどんなことが期待できるか、意見を交換した。ツアー面、ツアーと漁業の両方の面、漁業の面、これら3つから付随して漁業体験ツアーに期待される面、そして最終的に考えられる波及効果について、述べていく(表1)。

まず、ツアー面で期待できることについてまとめた。

鹿島の強みとして、刺し網漁が有名だが、その他にも様々な漁法があるため、バリエーションに富んだ漁業体験ツアーを組むことができる。子供から大人まで、漁業に慣れていない人たちにとって、それぞれの漁法を間近で見ることやよく獲れるヒラメ、エイ、カスザメなど生きた魚を見ることは、とても新鮮である。

この漁業体験ツアーを一時のイベントとして終えるのではなく、事業として持続してやっていけることを、鹿島の漁業者さんたちは期待している。

次は、ツアーと漁業の両方の面である。

漁業体験ツアーをおこなうことで、参加者は鹿島の漁業を知る機会を得る。また、ツアーに参加することで、現在の南相馬市の状況や福島県の漁業や漁業者の仕事を知ってもらうことができる。これらは漁業者が参加者に対する期待でもあり、漁業者に対するイメージアップへの期待もある。学生として、漁業の一部始終、例えば網の片付けなどまで、テレビでも見ることがない現場を見ることは参加者にとって新鮮ではないだろうかと考えた。

次は、漁業面である。

現在の漁業は週２日の試験操業のみのため、出漁数を増やして最終的に毎日海に出たい、という漁業者さんの意見が多かった。漁業体験ツアーを組むことは、漁業者さん自身の、海に出る回数を増やすことに繋がり、もっといろいろな漁を見てもらうことで漁業者の仕事ができることが期待される。

最後に漁業体験ツアーへの期待として、獲れた魚を捌きたい、という意見があった。獲った魚を食べるプログラムを入れることは、魚食普及にも繋がる。水揚げしたばかりの魚は新鮮で質がよく、鹿島の魚をたくさん食べてもらう良い機会になるだろう。

漁業体験ツアーに期待されることから生まれる波及効果として、様々なものが挙げられる。

まず、９月に開かれる「かしまみなとまつり」と連携することで、漁業体験ツアーに参加する人が増え、観光客の増加が期待できる。更に、鹿島の土地の魅力を知ってもらう機会にもなるのではないかと考える。鹿島は土地が広く、自然に溢れた景色が美しい。

次に、漁業体験ツアーで獲れたてを食して鹿島の魚の美味しさを味わうことで、地元の水産物のアピールや漁獲した魚の買取り、魚の価値を上げることに繋がるのではないか、と期待されている。また、海に魅力を感じてもらうことで、遊覧船という新しい事業も考えられる。鹿島の発展、復興には、後継者の育成に不可欠である。

最後に、農家民宿との連携である。漁業体験ツアーの朝は早い。前日に南相馬に入って泊まり、その夜と次の朝に、漁港で水揚げされたものや鹿島の農作物を使用した食事を提供することで、鹿島の食の魅力も伝えることができるのではないだろうか。

（まとめ： 黒田 麗子 ・ 小菅 綾香）

表２　漁業体験ツアー実施について想定した課題

| 漁業体験ツアー | 課題点 | 備考 |
|---|---|---|
| 大前提 | （ツアー運営のための）採算が取れるか<br>本操業でも出来るのか？<br>漁業体験ツアーと通常の漁業との兼ね合い<br>仕事の漁業と体験漁業との認識の違い | 本操業が再開してからもツアーを実施できるのか |
| 実施前 | 体験者用の体験プランの作成<br>体験学習のバリエーション<br>現在案として挙がっている刺し網以外の漁法<br>乗船以外に何か？<br>色々な人との体験ツアーをやりたい<br>子供には参加しにくい<br>漁業体験ツアーをどのように発信、アピールしていくか<br>アピール活動をどのように行うか<br>知名度アップ<br>認知してもらえるのか？<br>人が来るのか？<br>周囲に人が住めない<br>地産品(魚)で有名なものが乏しい<br>（ツアー実施が）天気に左右される<br>荒天時の代案<br>漁業体験ツアー実施時の安定した漁獲 | 災害危険区域指定のため |
| 実施中 | 人手不足（特に船酔いに強い人）<br>人材の確保<br>出港してからも説明が欲しい<br>安全面<br>安全性の確保<br>安全の確保<br>アカエイなど危険生物への対策<br>ツアー中は禁煙していただきたい | 震災当時の状況、復興の現状、漁獲物の解説など<br>ライフジャケット装着の徹底など |
| 実施後 | 獲った魚を食べたい<br>獲った魚を食べてもらいたい<br>獲ったものを食べたいはず<br>検査が必要<br>→そのための機械がない<br>獲った魚を港で食べられるか<br>(行政など各機関との)連携の難しさ | |

## 漁業体験ツアーをおこなううえでの課題

漁業体験ツアーの実施に際する課題点として、大きく分けて「大前提としての課題」、「実施前に解決すべき課題」、「ツアー実施中の課題」、そして「ツアー実施後の課題」の4つが今回の懇談会を通して浮かび上がった。以下、それぞれについて順に述べていく。

大前提の課題としては、「本操業が再開して以降の体験漁業の実施」に関する意見がいくつかの班から挙げられた。現在実施されている試験操業は実施数も少なく、本操業と比べると時間的な余裕がある。しかし本操業が再開した場合、曳網数や作業時間も増えることから体験漁業を行う余裕があるのだろうか、という体験漁業の実施そのものへの不安の声が挙げられた。また、ツアー運営のための採算をどうするのかという意見もあった。

実施前の課題については、体験ツアーの具体的な内容やプランに関する意見や、体験ツアーのPR方法についての意見が多く挙げられていた。ツアーで実施する漁法をどうするのか、乗船以外にできることはないかなど、実施に関する詳細な点も話題となっていた。また、体験ツアーのPRについては、具体的な情報発信をどのようにしていくかという意見の他、災害危険区域のため周囲に人が住めない鹿島地区で人を集めることはできるのだろうか、という意見も挙がっていた。他にも、地産品で有名なものが乏しい点、荒天時の代案、ツアー実施時に安定した漁獲量を得られるかといった意見があった。

実施中の課題については、人材の確保やツアーの安全に関する意見が挙げられていた。人材については、特に船酔いに強い人が必要とのことであった。また、出航してから船上で震災当時の状況や復興の現状、漁獲物などに関する解説をしてくれる人も欲しい、との意見もあった。安全面については、ライフジャケット着用や危険生物への対処などといった基本的な事項の他に、ツアー中は禁煙をしていただきたい、という意見も挙げられていた。

ツアー実施後の課題として多くの方から出されていたのは「体験漁業で漁獲した魚を食べたい、食べてもらいたい」という意見であった。学生からも現地の方からも同様の意見が出されており、特に関心の高い課題であると思われる。実現には放射能検査が必要であるが、そのための機械がないという意見交換もなされていた。また、その他の課題として、行政など各機関との連携の難しさという意見が挙げられていた。

上述してきたように、今回のワークショップを通して、改めて多くの課題点が浮かび上がってきた。いずれも簡単に解決する課題ではないが、今回のように様々な立場の方々が話し合える機会を設け、少しずつ意見を詰めていくことが解決につながっていくのではないだろうか。

（まとめ： 小野寺 暁 ・ 新城 遥己）

## 漁業体験ツアーについて知りたいこと

ここでは、「鹿島の海の漁業体験ツアーへの期待と課題」をテーマに行われた議論の中で生じた「知りたいこと」について、Q&A方式で簡潔にまとめる。

Q. 現在どのような漁業体験ツアーのプログラムを考えているのか。
A. 漁業体験ツアーの構想は出来たばかりで、詳細は決まっていない。

Q. シーズンごとに体験漁業の種類は異なるのか。
A. 年間を通じて、しらす・タコ籠・ハモ籠・流し網・ヒラメ釣り・刺し網のいずれかを操業しており、季節に応じた漁業を体験できる。

Q. 参加者は見学以外も体験可能なのか。
A. 魚種や漁法によっては簡単な作業も体験することが可能です。

Q. 体験ツアーのターゲットにする客層は？
A. 全年齢を対象として実施する予定。

Q. 漁業体験ツアーをどうアピール、発信していくのか。
A. 詳細については未定。

Q. 体験ツアーで獲れた魚の提供については？
A. 農家民宿と連携して、漁獲した魚をそこで調理、提供するのが理想である。また、地元の魚を使用した一品料理なども考案していきたい。

（8頁へ続く）

表３　漁業体験ツアーについて知りたいこと

| 漁業体験ツアーについての疑問 | |
|---|---|
| 疑問 | 誰が仕切るか<br>漁業規制<br>体験可能な時期<br>シーズンごとに内容の変化はあるのか<br>漁業の邪魔にならない範囲で何回できるか<br>漁業体験ツアーをどうアピール、発信していくのか<br>ターゲットにする客層・年齢層<br>福島の魚に対するイメージは大丈夫なのか<br>一般の人が見学以外で体験できることはあるか<br>漁船で釣り体験はできるか<br>の種類について<br>体験者にどこまでやらせるのか<br>現在どのようなプログラムを考えているか<br>漁業体験ツアーと食事 |
| いろいろな漁法を知る | 普段の漁法について<br>他地域との違い |
| 体験して思ったこと感じたこと | 楽しかったか<br>漁師のイメージ<br>魚の捌き方教室<br>魚の一品料理<br>宿への魚の提供について |

# ワークショップ《南相馬市鹿島地区での漁業体験ツアーを考える》
# 終了後、東京海洋大生たちはこう考えました

## 連携と中間支援組織がキーである

海洋政策文化学科3年　黒田 麗子

「鹿島の海と魚を語ろう」プロジェクトで鹿島を訪れたのは、今回で二度目である。初日は、農家民宿を経営する星巌さんのお話を聞き、2日目は、鹿島支所青壮年部の漁業者さんからお話を伺った。

昨年2月のワークショップでの課題として、「農家民宿と漁業者との連携」を挙げた。今回の訪問では、これに「現場と机上のギャップ」、「中間支援組織の必要性」のを加えた3つのことがらが今後求められると考えた。

まず、「農家民宿と漁業者との連携」についてである。

漁業体験ツアーを行う際、移動手段と漁船の参加時間が問題になる。JRの駅から真野川漁港までは、レンタカーを借りないと移動ができない距離である。また、船の出港は早朝である。このため送迎と、前日の夜から泊まれる場所が必要になるが農家民宿と連携していれば、参加者も参加しやすくなるだろう。また漁船ツアーで獲れた魚を宿に持ち帰って捌き、宿が食事として提供することもできるだろう。「いちばん星」の星巌さんも、鹿島の魚のメニューを農家民宿全体で決め、食事に出すことをアイディアとして述べられた。南相馬の食の魅力を強化することは武器となるだろう。

次に、上記に付随するが、「中間支援組織の必要性」である。

今回、青壮年部の漁業者さんと話していると、前回と同様に、農家民宿との連携は考えたことがない、という意見がほとんどであった。また、仮に連携をしようと思っても、その舵取りが誰なのかが問題になってくる。星巌さん自身、様々なことを考えておられるが、すべての連携の中心役になるのは負担が大きすぎる。連携に対して意欲的であるが、今後、どういう風に進めればよいのかわからない、という勿体無い事態に対し、連携を担当する中間支援組織が必要であると考えた。

最後に、「現場と机上のギャップ」である。これは鹿島に限ったことではないが、行政が用意したものと現場が必要なものが違ったり、現場に声が届かなったりしている。たとえば、「みなみそうま復興大学」で復興についてディスカッションが行われていたが、それについて、知らなかった、あるいは一部しか知らないので、挙がった意見全部を知りたい、そこに参加したかった、現場のニーズに合っていない、などといった反応があった。結局のところ、現場を介さず行われる机上の話では、ギャップが生まれてしまうことが今回の訪問でわかった。現場を介した話し合いの席や、プロジェクトのプロセスの開示などが求められるだろう。

これらを踏まえて、漁業体験ツアーの企画には、「連携」と「中間支援組織」が特に重要だと考えられる。

（くろだ れいこ）

## 課題は連携をとること

海洋政策文化学科3年　小菅 綾香

この度、福島県南相馬市を訪れて、農家民宿を経営されている星巌さん、さらには鹿島支所壮青年部の漁業者さんからお話を伺った。異なる両者に共通して、「連携の必要性」があると感じた。

星さんからのお話では、市町村などの行政機関で作成している観光PRのパンフレット情報が集約化されておらず、観光客にまとまった情報提供ができていないという。これは隣接する行政機関同士の連携がとれていないためである。

また、鹿島支所での漁業体験ツアーについてワークショップを行った。そこで、漁獲した魚の利用として「食」という意見が出された。しかしながら、鹿島支所には放射線量を測定する機械は設置されておらず、獲りたての魚をその場で食べることは難しい。そこで、農家民宿と連携し、料理を提供する案が出された。その場合も安全面を考慮し、放射能汚染数値を測定する機械が設置されている漁協を通して、農家民宿に卸すのが望ましいのではないかという結果になった。

このように、南相馬市の今後の発展には連携が鍵となってくるだろう。けれどもそれには、現場の状況をより把握した機関、または人材が仲介に入ることが、成功へと繋がるのではないだろうか。

（こすげ あやか）

## 情報の発信が重要

大学院・海洋資源環境学専攻　修士 1年　小野寺　暁

今回のワークショップに参加して、鹿島の方々の地域復興に対する熱意を強く感じることができた。

今回は2日間の日程の中で、初日は農家民宿の現状に関するお話を伺い、さらに翌日に漁業者の方々と漁業体験ツアーに関する意見交換を実施した。農家民宿のお話では、震災による風評被害を受けて、藍染めなど新たな農業体験を考案されたというエピソードが印象的であった。また、2日目の意見交換は、実際にツアーを行っていくにあたっての実施形態や、農家民宿、行政など各団体との連携など明確なプランについても我々学生と鹿島の方々との間で意見を出し合うことができ、有意義な議論となったように思う。体験ツアーの内容についての具体的な案や、ツアーや漁師さんたちについての印象など、鹿島の方々がツアーに対して非常に積極的に意見を出されていたのが印象に残っている。また、今後もこのような交流の場を開きたいとの声もいただき、外部の者として嬉しく思ったのと同時に、鹿島の現状を多くの人に知ってもらいたいという熱意も感じられた。

このような鹿島の方々の熱意を生かすためには、やはり情報の発信が重要になってくるのではないだろうか。今回のワークショップを経験した身として、周りに伝えていけることはないか、引き続き考えていこうと思う。

（おのでら あきら）

## 今後の発展のために見えてきた課題

大学院・海洋資源環境学専攻　修士１年　新城 遥己

今回の「いちばん星」さんでの宿泊では、農家民宿の現状について詳しくお話を聞かせていただけた。

震災前には、鹿島・原ノ町に合わせて10軒ちかくあった農家民宿も現在では被災の影響から6軒ほどに減ったようだ。いちばん星の宿泊状況は、震災後2，3年は、まだ放射能問題のこともあって農業体験（キノコのみ基準値クリア）ができる状態ではなく、一般の客層が薄く、災害・復興ボランティアの方がほとんどを占めていた状況であった。この頃は農家体験の代わりに藍染体験や郷土料理を活かして観光客を呼び込んでいた。フィリピンなどからも来ており、海外からの関心もあったそうだ。

その後震災から7，8年が経ち、ようやく農業体験を開始でき、お客さんも増え始めたようだ。そのため、今後の発展のために、作物収穫の年間スケジュールの作成、農家民宿では扱えない規模の農作業の一般の農家との協力、今回の主旨である漁業体験を農泊プランに組み込んだりしての事業の拡大など、今後も多くの発展が望めるようだ。

今回泊めていただいた農家民宿「いちばん星」のご主人、星さんが、私たちのように大学などが復興プロジェクトに関わることをひとつのきっかけとして、農業・産業・漁業をまとめて行きたい、と話されておられるのを聞いて、少しでも力添えが出来ていると知り、今回参加した実感を抱いた。

今回は、漁師さんたちと体験漁業について語り合った。普段の生活では目にすることのない漁師さんの姿や、漁の様子などを見たりする、とても貴重な経験ができるプログラムになるのではないかと思う。しかし、新しい事業を始めようとしている為、安全面、お客さんの満足度、ツアー開催の時期などたくさんの課題が見えてきた。けれども、やることには意義がある。今の福島を本当に知ってもらうためにはとても重要なプログラムの一つであるので、実現してほしいと思います。

（しんじょう はるき）

## 被災地の現状と漁業者のプロジェクトに対する姿勢

海洋政策文化学科4年　八田 遼介

「いちばん星」では、山々に囲まれた自然豊かな地で過ごすことが出来た。宿泊地周辺はゆったりとした時間が流れ、夕飯も美味しく、特に白米が絶品であった。ここが被災地であることを感じることはなかった。

しかし、夕食後に星さんのお話を聞いて現実に引き戻された。そのお話の中で特に印象に残っているのが、避難住民への補助金の話である。原発事故の影響で故郷を離れることとなった被災地の人々には補助金が出ているという事であったが、その額や対象者が同じ町でも異なっており、同じ町の被災者でも全く補助金を受け取れていないという事を知った。それが原因かは定かではないが、町の地区ごとで非協力的な姿勢をとっている面があることが分かり、普段の生活では知ることのない被災地の現状が垣間見えた。

２日目は、地元の漁業者さんとワークショップを行っ

た。ワークショップで感じたことは、漁業者さんの漁業に対する熱意であった。原発事故の影響で思うような漁業ができないなかで、何とか状況を改善しようと漁業者さんと、話し合った。ワークショップでは特に体験漁業について意見を出し合ったが、漁業者さんのお話を聞くと、より一層漁に対する熱意が伝わってくるように感じた。漁業者さんから聞こえた声のなかに、一日でも多く海に出られるようにしたいと言うものがあり、特に印象に残っている。そのためにも、従来の漁業にとらわれず、体験・観光型の漁業の可能性を見出そうと、さらに様々な意見を出し合った。

前向きな意見が多く出るなかで、いざ本操業が始まり、本格的に漁業ができるようになった際には、こうした体験型の漁業をどうしていくのか、と言った慎重な意見も見受けられた。しかしながら、現状、厳しい操業が続く中で、こうした新しい取り組みを取り入れようと検討する漁業者の姿勢に少なからぬ希望を抱くことが出来た。

（はった りょうすけ）

## 体験ツアーのプログラム作りとPRを

海洋政策文化学科3年　鈴木 明人

今回、鹿島の漁師さん達にお世話になり、また、福島県南相馬市の農家さんや漁師さん達から様々なお話を聞き、彼らと議論することで、地域活性化について考える良い機会になったとも思う。

農家や漁家が農業体験や漁業体験ツアーを行い、都市部の人たちに対して体験学習の場を提供しつつ、地方の暮らしそのものを観光資源としてPRすることは地域振興の一つの手段として効果的であると感じた。

また、彼らとの議論の中で自分は「リーダーシップを発揮する中心的な存在」の必要性も感じた。議論の中では度々、農家と漁家が連携をとって体験ツアーを実施したらどうかとの意見が出された。連携をとることで、海にも面しているという南相馬市の立地を最大限生かすことが可能となる他、獲れた魚介を農家民宿で提供することも可能となる等の相乗効果も期待できる。

しかし、漁師さんにお話を伺ったところ、農家と漁家の間で連携についての話し合いを行う機会や場は一度も設けられていないという。体験ツアーをより良い形で実現するためには行政が中心となり、地域おこしの一環として体験ツアーのプログラム作りやPR・発信を行っていく必要があるのではと考えた。

（すずき あきと）

## 漁業体験ツアーについて知りたいこと

（5頁からの続き）

Q. 福島の魚に対するイメージに問題はないのか。

A. 依然として悪いイメージは残っている。漁獲した魚の放射線量は徹底的に検査が行われており、イメージの改善は今後の大きな課題である。

Q. 漁業規制については？

A. 漁獲可能な期間や量は漁協によって厳しく管理されている。獲れた魚を宿に提供する場合であっても、一度漁協を通す必要がある。

（まとめ： 鈴木 明人）

## 編集後記

相馬双葉漁協鹿島支所は、福島県浜通り地方のなかでも若い漁業者の方が多い地区です。青壮年部のみなさんには、昨年11月に東京海洋大学で開催した「福島の海＠海洋大プログラム2018」にもおいでいただき、ご自分たちの漁業などについて、動画で示しながら来場された方々にお話しいただきました。

東日本大震災からこの3月で8年が経ちます。津波に加えて原発事故によって大きな被害を受けた福島県沿岸では、震災直後から、漁業関係者と行政が協力して放射能モニタリングを開始し、水質や底質、水産物についての科学データを丹念に積み上げてきました。2012年6月からは、安全性が確認された海域・魚種について、流通販路のモニターを目的とした「試験操業」を始め、現在ではほぼ全ての漁業で試験操業がおこなわれています。昨年６月からは首都圏の数か所の量販店で対面販売の取り組みもおこなわれています。

今回の瓦版編集では、黒田麗子さんに多くの作業を担っていただき、大助かりでした。この研究は、みなみそうま復興大学、東京海洋大学学長裁量経費、科研費（KAKEN16H03005）の助成を受けています。

発行　江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477　東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学江戸前ESD協議会
電話/FAX　03-5463-0574（川辺研究室）
電子メール　kawabe*kaiyodai.ac.jp
(メール送信時には*を@にしてください)
ホームページ http://www2.kaiyodai.ac.jp/~hirokun/edomae/index-esd.htm